

最近では日本各地で異常気象のニュースが相次ぎ、夏には猛暑日が観測史上最多を更新したという報道や三十年に一度とも言われる少雨など、これまでに経験のない天候の不安定さを実感する機会が増えています。

こうした報道に触れるたび、環境の異変を意識する機会が多くなっていると感ずる人もいます。環境問題というと、地球温暖化や海洋汚染、大気汚染、森林の減少など、規模の大きな話になりがちです。しかし、その要因をたどると、私たち一人ひとりの暮らしと密接につながっており、決して無関係ではないことにも気づきます。

例えば、マイクログラスチックごみの問題があります。ポイ捨てされたプラスチックごみが川や海を流れる過程で砕けて5ミリ以下になり、それが魚や鳥の体内に入る場合があると指摘されています。

やがて食物連鎖を通じて私たちの体にも影響を及ぼす可能性があるとも言われています。プラスチックの便利さを追求してきた結果が、目に見えない形で自分たちに返ってくることを思うと、身近なところから行動を始めることの大切さを改めて感じるのはないでしょうか。

Aさんが毎日水筒を持ち歩くようになったのは、小さな出来事がきっかけでした。駅のホームを歩いていたら、飲み終えたペットボトルをゴミ箱に捨てようと視線を向けると、ペットボトル専用のゴミ箱が溢れかえていたのです。

投入口からはペットボトルがはみ出し、



身近な工夫の連続が 環境行動を高めていく

周囲にもいくつか転がり、ペットボトルが山のように積み重なっていました。その光景を前に、自分が手にしているペットボトルを見て、「これから捨てる」として自分分は、この溢れたペットボトルと本当に無関係だろうか」と思ったのです。そう考えた瞬間、環境問題が「遠いどこかの出来事」ではなく、「自分の生活と地続きのこと」と感じられました。

自分にも出来ることは何かと考えたAさんは、翌日から水筒を持ち歩くことにしました。朝、お茶を入れるひと手間や、バッグの中でかさ張って少し重くなるなど、最初は多少面倒に感じましたが、一週間も経つと自然と習慣になりました。

その後の生活にも少しずつ変化が生まれました。エコバッグを使ったり、カトラリーを持ち歩いてプラスチック製スプーンやストローを受け取らないようにしたのです。Aさんは、以前より意識が変わり、身の回りに目を向け、自分にできる小さなことに取り組む大切さを実感しました。

地球倫理とは、地球に暮らす一人として自覚を持ち、次世代に責任を果たそうとする生き方でもあります。理念としては大きく感じられますが、その実践は思ったより身近なところから始められるのです。

私たちが住む地球は、次の世代から預かっている大切な宝物とも言われます。貴重な預かりものを、少しでも良い状態で渡していくために、身近な環境に目を向け、自分にできることを続けていきたいものです。